

「千曲川旅情の歌」の考察

— 教材研究のために —

橋 本 暢 夫

○ はじめに

- 一、教材としての位置
 - 二、作品鑑賞の特色
 - 三、指導の研究
 - 四、参考文献
- おわりに

はじめに

島崎藤村の作品が、教材としてどのように採りあげられてきたか、その範圍と傾向については、昭和35年度の大下学園祇園高校国語科研究会において報告を行なった。

ここでは、私自身の実践の営みを深めるために、「千曲川旅情の歌」をとりあげ、先学の研究と、学習者の反応のうえにたつて、教材を研究し、指導上の留意点を考察してみたい。

一、教材としての位置

「千曲川旅情の歌」が、旧制中学校の教材として採りあげられるようになったのは、大正六年一月八日富士房発行の「帝國読本」(芳賀矢一編)以後のことである。その後の採録の傾向を眺めると、圧倒的に中学三年の教材として採られていることがわかる。このことは、藤村の他の詩教材の採録の傾向——たとえば、「問答の歌」が、中学一年に、「椰子の夷」が中学二年に、「晩春の別離」が中学四・五年に主として採りあげられたこと——と考えあわせてみると、「千曲川旅情の歌」が、文芸研究教育期における中学三年にふさわしい文芸性をもつものと考えられていたといえる。

戦後においては、この「千曲川旅情の歌」が鑑賞指導の正面にすえられるようになってきた。すなわち、現行教科書の教材としては、四社(好学社・筑摩書房・秀英出版・中央図書)が、高校一年で、二社(角川書店・明治書院)が高校二年で採りあげており、鑑賞教材として重要な位置を占めてきている。

二、作品鑑賞の特色

教材として以上のような位置を占めてきた「千曲川旅情の歌」を、先学諸氏がどのように鑑賞し、解説していただけるかを考えてみたい。

「千曲川旅情の歌」を鑑賞の正面にすえ、作品鑑賞の例として取りあげられたのは、大木惇夫氏が最初であろう。「詩の作法講義」昭和10年1月1日、万昇堂刊）以下ここでは、吉田精一氏、三好達治氏、伊藤信吉氏、坂本浩氏、関良一氏の考え方を取りあげて考察をすすめることにしたい。

これら六氏の取りあげ方を大別すると、大木・三好・伊藤の三氏のばあいは、詩人としての立場からの解説であり、吉田・坂本・関の三氏のばあいは、研究者の立場からの解説であるといえよう。すなわち、前の三氏は、まずこの詩にひかれる享受者としての自己の心をひれきし、ついでこの詩の魅力をも、詩人としての立場から分析し、説明してられる。これに対して、後の三氏は、作者の経歴・境遇・心境、そして先行文学との関係を、文献のうえから明らかにし、そこにこの詩の意義や価値を見いだしていられるのである。

さて、これらの六氏がそれぞれの解説のなかで共通に述べていられるのは、ふたつのことについてである。そのひとつは、この詩の(一)が春まだ浅い千曲川のほとりでの遊子旅情の悲しみをうらたったものだという点である。ふたつめは、その悲しみが五七調で重々しくうたわれているという点である。これらは当然のことであるが、詩の見方の基本になるものとして留意しなければならぬと考へる。

続いて、六氏の鑑賞・解説の特色について考えをすすめてみたい。

イ、大木惇夫氏は、「詩の作法講義」のなかで、まず「書き出しの二行からして既に羨しい」と述べられる。また「入浅くのみ春は霞みてVといふ一行は言葉の操作に於て非常に巧みな言ひ廻しであると思ふ」とか、「入暮れ行けは……歌哀し……Vといふ第三聯の書き出しも非常に巧みで、味の豊かな表現である」といったふうに、リズムとことばのいいまわし(表現)の面から、この詩を鑑賞し解説してられる。そして、この詩の(一)を、旅の哀感をうたったものの、(二)を人生に対する感慨をうたったものとしてはあくしていらる。

ロ、吉田精一氏は、「日本近代詩鑑賞(天明蕨書四冊)(新潮文庫三冊)」のなかで、この詩の脚注をなすものとして「千曲川のスケッチ」を引かれたのち、この詩に影響を与えたと思われる東洋の詩文を、文献のうえからとりあげ、広く例をあげて解説をすすめていられる。そして、第一連の静かな歌いだしに詩の性格をとらえられ、続く入雲白くVによって空の青さも想像されると詩のふん囲気を説明されたのち、けつきよく「前篇に於ては猶旅人としての旅情が色濃いが、後篇になつては思想も詩情もはるかに広く深い背景に佇立し、そのリズムは一層心境的に沈潜した」と述べていらる。そしてテーマとしては、「とくべつに近代的な新しさといふべきものは見出されない。……杜甫・芭蕉の感慨と大きい径庭はないのである。」と結んでいらる。

ハ、三好達治氏のばあいは、(一)だけをとりあげ、(「詩を読む人のために——学生教養新書」至文堂)まず「たいへん口調がよく、調子の起伏が自然になだらかな間に、何かたいへん気持のいいものが口調調子の方にある」と書かれ、この詩の魅力をも、内容の単純さと

音韻的成功という面から解明していられる。すなわち、五七調は単調に陥りがちで、かならずしも人のいうように長所にならぬものであるが、この作品はその長所を最も巧みに生かしたものだと思われ、理由として、O・UとKとの巧みな組合せの効果、歌いだしの二行をたいへん気持のよいものにしたと説明される。(第三連も同じ効果をもつといわれる)内容の単純さという面からは、否定的命題がたいへん多いことをあげていられる。そしてこのことは、形象の要素がはなはだ少ない結果になり、それだけに詩的印象が一点に集中されて、主観的気分が濃厚になると説かれる。けっきょく氏は、このように一点に集約された印象が、効果的なりズムをもつことよって、いわば音楽の状態に最も近くなるといわれるのである。氏のこの考えと、大木氏の「人間の感情の流れをそのまま美しいリズムをもって伝える芸術は抒情詩と音楽の外にない。」という意見をあわせ考へる時、「詩人がどれくらい詩人を知るか」ということばを思いださないとはいえない。

ニ、伊藤信吉氏は、「現代詩鑑賞(新潮文庫)二冊」のなかでこの詩をとりあげ、「この詩は、人の胸にしみとおるところがある」とまず感想を述べられ、その心ひかれる原因を、藤村自身の心の内部と、歴史・社会の動きとの面から明らかにしようと試みていられる。すなわち、この詩が青春の情感をうたいながら、暗く沈んだ憂愁の色をただよわせているのは、作者自身「自己の青春の光彩が生命のうちから薄れていくことを知って、自己への慰めを試みたからだ」と考えられるのである。そして、(一)に含まれる憂愁や暗鬱の情は、ひとり藤村のことではなく、明治三十年代の末には、ローマン派はすでに最盛をすぎ、人生と現実への関心を求められる段階にき

たのだと見解を述べられるのである。

ホ、坂本浩氏は、「現代文の教え方(至文堂)」のなかで、詩のテーマを、千曲川のはとりにおける旅人の悲憂という表現でとらえられ、中学・高校の先生むきに、細かく分析・解説をしていられる。たとえば、(一)の第一連では、すべての事物が人遊子悲しむVという焦点にしばられている。同じように、第二・第三連は、人旅人の群れはいくつか……Vと人草まくら……Vに集中され、流れていくと説かれる。そして、けっきょく(一)の主調は人遊子悲しむVにあり、(二)のそれは、人……うれひをつなぐVにあって、その(二)には心境の表白、歴史的追想、自然と人生の対比が含まれていると結ばれる。

ヘ、関良一氏は、「評釈現代文学・近代詩(西東社)」で、過去の業績をめんみつにふまえながら、(一)は、青春の生命に生きることをねがいがら、そのねがいの実現できないなげきをうたったもの、(二)は、人間の理想や願望や行為のむなしさを諷刺したものだとあくしていられる。したがって、(一)では、わかわかしい潑刺とした青春の生命に生きることを願うゆえに、はこべ・若草・麦・草笛・草枕など、わかわかしい草への愛情と郷愁につらぬかれているのだと考えていられる。そして、三好産治氏のとらえられた否定的表現については、これらの打ち消しは、「無」につながるという考えを示していられる。

「千曲川旅情の歌」についての六氏の鑑賞・解説の特色は以上のようにである。これらの先学の考えをもとにして、この詩の指導の研究に筆をすすめてみたい。

三、指導の研究

1、作品について

「千曲川旅情の歌」の(一)は、もと「旅情」と題して『明星』(明治33年4月1日)に発表され、「落梅集」(同34年8月25日)に小諸なる古城のほとり」と改められた。のち「藤村詩抄」(昭和2年7月10日)に現在のように採録された。

「千曲川旅情の歌」の(二)は、もと「一小吟」と題して『文学』(明治33年4月13日)に発表され、「落梅集」に「千曲川旅情のうた」と改められた。そして「藤村詩抄」に現在の形としてまとめられた。

2 学習者の反応

学習指導にさきだち、学習者にまず一読後の感想を求めたところ、次のような結果がみられた。高二、一クラス50名中、△さみしい感じ15V、△はかない感じ7V、△しみじみとした感じ5V、△悲しい感じ3V、△せつない感じ3Vなどである。このことは、この詩の受けとられかたとして、自然の傾向を示しているといえよう。

次に好悪についての間に、△好きVと答えたものは、50名中の45名であった。その理由としては、多くの者が△調子のなだらかさV、△わかりやすさVをあげている。しかも、この△わかりやすさVのよりどころとしては、(二)の三連△ああ古城なにを語り…Vがあげられている。そして指導上注意しなければならぬのは、これがそのまま印象的なところとしてあげられるのであり、さらに、作者のいいたいところとしてはあくまであることである。つまり、学習者たちは、作者の感慨がなまのまま表わされているところ

を、作者のいいたいこととしてとらえているのである。したがって、かれらは、この詩のテーマは、悠久な自然に対し、人生のはかなさ、さびしさを述べたもの、といったとらえかたをするのである。

3、指導上の留意点

以上のような学習者の反応のうえにたつて、この詩を指導するばあいの留意すべき点について考えてみたい。まず、指導の目標を、「詩の感動の中心をとらえさせ、作者のものの見方、感じ方を理解させる」ところにおきたい。また、そのばあい、学習者のなまの感想を正しくはなくし、鑑賞力をのばすことに留意したい。

イ、主題について

主題について考える時、まずこの詩の底を流れる情感が、虚無感でないことをみきわめておきたい。暗鬱な心情ではあるけれども、底を流れるものは、まさしく青春の情感であることをとらえておきたいと思う。したがって、私はこの詩の主題を「遊子旅情の悲しみ」としてとらえたいと思う。この詩の(二)については、人生の感慨をのべた個所にとらわれず、人生を旅する遊子が旅情の悲しみをしばし岸につなぎとめるところに思いをひそめたい。このような視点にたつて、藤村の詩の生命を新時代のローマン性にみいだすことができると思う。

ロ、音調について

音調の面については、大木氏、三好氏によって音楽の状態に最も近いといわれている。すでにいわれてきているように、五七調文語定型詩の典型といてよいと思う。このばあい、この定型詩が単調に陥っていない理由についての三好達治氏の分析に心をとどめたいと思う。

ハ、いわゆる否定的命題について

(一)の第一連入線なすはこべは萌えずVからはじまる、いわゆる否定的表現については、三好氏、関氏に大きくとりあげられてきている。三好氏は、これらの否定的表現は、内容を単純化して印象のまとまりをよくし、一点に集中させる役割を果しているといわれる。

一面、関氏は、この否定的表現が「無」と結びつくといわれる。私としては表現のもつ機能の面に着目した三好氏の説に全く同感である。そして関氏の「無」に結びつくという考え方については、別の視点からこの否定的表現をみつめたいと思う。すなわち、藤村におけるローマン性が否定的発想をとるということに注意したいと思うのである。「春」における岸本の、「自分のやうなものでも、どうかして生きたい。」というひとりごとに象徴されるように、藤村の生き方は、たえず自己をみつめ、自己を否定する立場にたっていることに目をむけたい。この詩におけるローマン性も、否定的に表現されているといえるのではなからうか。しかも、この否定的発想は、王朝文芸以後の一つの伝統的発想のうえにたつものと考えられるように思う。すなわち、在原業平の、人世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからましVにその起源をみいだすことができるとではないだろうか。

ニ、考証に終らぬ配慮について

ここで考証に終らぬ配慮といったのは、文芸教育の場になつとき、作品を分析し、先行文学との関係を追求し、考証が進むにつれて、指導者がそのすべてを与えようとする傾向を反省しておきたいという考えからである。

詩の鑑賞指導のうえでは、とくに知識の注入をさけ、詩そのもの

によみひたらせることが重要であるからである。したがって私の意図は、作品理解のうえでの基本的なものだけをとりあげ、他を捨てようとするところにある。

(一)の第一連では、①まず書きだしの美しさに注意したい。②入線白くVからは、空の青さとともに「春は空から」といわれる北国の風土が想像できる。③入遊子Vの語からは、文雅な教養ある旅人が想いだされる。しかもこの語から入悲しむVの内容が限定され、第三連の入濁り酒…Vとひびきあうことをとらえておきたい。

④入線なすVの入なすVには諸説があるが、落梅集の他の用例からみて、いまは入線をなすVと考えておきたい。⑤三行めからはじまる否定的表現についてはすでに考察した。

第二連の①入かをりVは野の草の香をさしている。そしてこの連では、入浅くのみ…V入麦の色はづかに…V入旅人の群れは…Vといった巧みな表現に目をむけておきたい。

第三連では、①入暮れ行けば…Vと夕暮への思慕の情がうたわれることにまず注意したい。「舟路」にもみられるこの夕暮への思慕は、藤村の心の傾きをよく表わしたものと見えるからである。②しかも、この入暮れゆけば…Vの表現が簡潔で豊かな味わいをもつことも見おとしてほならないと思う。③そして、すべてが夕闇に没したのち野をわたる草笛の音は、いかにも旅人の心にしみいるものがあるであらう。この視覚によるはあくから聴覚によるはあくへ、そして再び視覚によってとらえられる対象のとらえ方も見おとすことができぬ。④ここには波のリズミカルな流れも感じられる。このような心象風景のなかで、入濁り酒濁れる飲みてV慰められる旅情も、その慰めが⑤入しぼしVのことであり、醒めて後のさ

びしさは、より一層深まることにも注意したい。

(二)の第一連では、感慨がはじめから歌いだされる。そこでは、①
▲きのふまたVの▲またVにまづ目をむけたい。▲またVには、き
のふも、一昨日も、そしてずつと前も、という深い気持がこめられ
ていると思えるからである。②▲かくてVは、このよう(に)々
というくらいの意味であろう。そして③・四行めの▲この命なに
をあくせく……Vというなめらかな調べが、一・二行めの気おった
表現をやわらげるのに成功しているともいえる。

第二連では描きだされた風景が詩想の具象化に役だっている。朴
甫の「春望」や、芭蕉の「平泉」を想いおこさせるが、詩の情調を
支配してしまふまでには至っていないように思える。

そして第三連で再び人生に対する感慨を述べたのち、詩は、景と
情を統一にはあくした第四連へとわたしこまれる。第四連では、
柳かすみ、浅春の水流れるなかで、人間の愁いを、わずかに岸につ
なぎとめるわびしさがわれわれの胸をうつ。

以上、先学の諸説をふまえて、私なりに留意したい点をとりあ
げてみた。このほか、すでに指摘されているように、(一)では▲遊
子Vの語源、ゴゴリの▲大野のたびねV草笛についての▲胡笳・
羌笛Vの譚案説、▲濁り酒Vの語源、さらに(二)では、春道列樹の
▲昨日といひVの影響、また陶潜▲帰去来辞V、パアンズ、朴甫、
芭蕉、人麻呂さらに和歌の発想の影響など、指導者として作品研究
のうえでの知識が必要である。しかし、詩の鑑賞指導の場におい
て、これらの知識を注入することはさげねばならないという考えか
ら、ここでは留意点としてあげることをひかえた。

四、参考文献

○詩の作法講義

大木惇夫

昭和10・1・1

万昇堂

○日本近代詩鑑賞(天明叢書四冊)

吉田精一

昭和21・26

天明社

(新潮文庫三冊)

昭和28・29

新潮社

○近代詩(文芸読本1・18) 富倉徳次郎

昭和23

成城国文学会

○日本文芸の鑑賞 詩歌篇 日本文芸研究会

昭和25

東徑書房

○学生のための詩の鑑賞(天明叢書)

安田保雄

昭和25・11・25

天明社

○現代詩鑑賞 二冊

北川冬彦ほか編 昭和25・26

第二書房

○藤村名詩鑑賞

島田譚二・吉田精一 昭和26・3・15

天明社

○近代詩歌精講

岡一男 昭和26・8・25

学燈社

○詩を説む人のために(学生教養新書)

三好達治 昭和27・6・1

至文堂

○現代詩の鑑賞(新潮文庫) 二冊

伊藤信吉 昭和27・29

新潮社

○現代詩(学燈文庫)

吉田精一 昭和28

学燈社

○和歌・俳句・詩(国文学学習叢書)

富倉徳次郎 昭和28・3・25

旺文社

○藤村名詩鑑賞(河出新書) 吉田精一

昭和29・10

河出書房

○通解現代詩・和歌・俳句 (角川文庫)

昭和36・6・5

角川書店

○現代文の教え方

坂本浩 昭和30・4・25

至文堂

○高校国漢基礎講座(その1)

岡良一 昭和30・6・30

河出書房

○「千曲川旅情の歌」考（「高等国語教室」五号）

関 良一 昭和29・11 大修館

○必須 近代詩・短歌・俳句

松隈義勇・石川重身・佐藤憲一 昭和30 研数書院

○「千曲川旅情の歌」の注釈について（「解釈」）

関良一 昭和30・12―31・1 解釈学会

○近代詩読本

吉田精一 昭和31 筑摩書房

○評釈現代文学・近代詩 関 良一

昭和31・5・20 西東社

○千曲川旅情の歌（「国文学」）

武田元治 昭和31・6・20 学燈社

○近代詩要解（文法解明叢書）

中塩清正 昭和31・10・20 有精堂

○千曲川旅情の歌（「解釈」）

慶野正次 昭和32・7・1 解釈学会

○近代文学鑑賞講座第六卷「島崎藤村」

瀬沼茂樹編 昭和33・9・5 角川書店

○鑑賞現代詩 I

吉田精一 昭和36・11・25 筑摩書房

おわりに

以上、私は教材研究の立場から、一、教材としての位置、二、先学作品鑑賞の深まりのプロセス、三、指導上の留意点、四、参考文献としてとりあげ、考察を進めてきた。そして、この「千曲川旅情の歌」の生命を、近代的抒情性と、新時代のロマン性にみいだすことが適当であると考えるに至った。このロマン性が否定的発想をとるため、「無」につながるという意見もだされてきているが、

藤村詩の生命は、あくまでも前掲の二つにみいだせるのではないかと考える。この抒情性、ロマン性のゆえに、藤村の詩の世界は、いつの時代の青年たちにも共感を呼ぶのであり、また教材として長くその位置を保ち続けているのであると考える。

この考察にあたっては、多くの先学の業績を参考にさせていただいた。なかには、ふじゅうぶんな受けとめかたのため、礼を失したむきもあるのではないかと恐れている。これも未熟な国語教育者が、自己の学習指導を深めようとする意図によるものであることを汲んでいただいて、非礼の点はお許しいただきたい。

（三原高校教諭）